

令和 8年度 結果の分析及び今後の改善策(案)

中間・最終

両城中学校区 校番 19 学校名 両城小学校

重点	d 中期(3年間)経営目標	e 短期(今年度)経営目標	l 結果の分析 (結果と課題をこう考えます)	m 今後の改善策(案) (こう改善します(案))
確かな学力の向上 (教務部)	学力の向上	基礎・基本の徹底	国語科・算数科の単元テスト60%未満の児童の割合は、国語科5.8%、算数科4.8%と、両教科共に指標を達成できた。全単元を見通すと、各学年で、単元によってポイントに差がある。 タブレット端末を活用するのは勉強に役立つと考える児童の割合は93%で達成できなかった。調べ学習や個人思考、考えの交流等、どの授業でも、タブレットを活用している。また、全校で、家庭学習やスキルタイムなどで、キュビナに取り組んできたことにより、児童自身の有用感につながったと考える。しかし7%の児童がタブレットの有用性や効果について実感できていない。	特別支援教育の視点から、児童が、自分に合った学習方法を選択できるようにするなど、個へのアプローチを充実させていく。 朝のスキルタイムや国語科・算数科の授業始めに、各学年で漢字・計算の学習に取り組む。例えば、ミニテストやドリル、全学年の復習、キュビナなどを活用し、反復や一人一人の習熟度に応じた指導を通して、学習の定着を図る。 タブレット端末で児童が提出した学習の成果物について、評価をフィードバックしていく。キュビナに積極的に取り組んだ児童を学級の中で紹介するなどして、やる気につなげ、タブレットを活用する学習のよさを実感させていく。
		思考力・判断力・表現力の向上	国語科で87.3%、算数科で80.8%と指標を達成した。二川授業スタイルを基盤とした授業づくりとノートづくりの成果と考える。算数科・国語科共に目標値には達しているが、算数科の方が低かったため、学力をさらに向上させるために、自分の考えをもち、相手に伝わるように表現することが必要である。	今後も、継続的に学力が定着するように、全校で指導方法について研究・実践を進める。特に、ノートづくりを通して、自分の考えをもつことができるよう指導していく。例えば、自力解決の前に全体で解決の見通しをもたせたり、視覚支援をしたりして、考えを1つはもつことができるようにする。また、自分の考えを伝え合う場の設定や発問の工夫により、考えを比較、関連付けし、児童の思考を整理・深化させていく。
豊かな心の育成 (生徒指導部)	自尊感情の向上	自他を大切にし認め合う児童の育成【いじめの防止】	自分にはよいところがあると思っている児童の割合は87%(低学年93%、中学年85%、高学年81%)で目標値を達成することができたがどの学年にも否定的な回答をしている児童が一定数存在している。高学年は81%で目標値を下回っている。 いじめは、どんなことがあってもいけないことだと思ふ児童の割合は、98%で達成できなかった。ほとんどの児童は、「いじめはいけない。」と思っている。しかし、中学年・高学年の中に否定的な考えをもっている児童がおり、個別に話をして思いを聞きながら対応を継続する。	今後も児童が自分のよさに気付けるように、日々の生活の中で苦手なことでも頑張っている姿や他の教師から聞いたよいところを伝えていったり学級の中でお互いのよいところを伝え合う場を設けたりする。また、縦割り班活動の振り返りでは、基本の型を提示し、抽象から具体的な評価ができるようにする。子供同士の評価につなげていく。また、否定的に考えている児童については、全職員に周知し、より多くの職員で声を掛けたり見守ったりしていく。
		主体的に行動できる児童の育成	将来の夢や目標をもっている児童の割合は93%(低学年93%、中学年100%、高学年88%)で目標値を達成することができた。全校のうち8人が否定的な回答をしている。半数以上、自分によりよいところを見付けられない児童と重なっている。日々の教育活動の中で、小さな目標を達成する成功体験や役割を果たし感謝される体験等を積み重ね、自己理解を深め、自分に自信をもたせる体験が更に必要である。	今後も児童が自分のよさに気付けるように、日々の生活の中で苦手なことでも頑張っている姿や他の教師から聞いたよいところを伝えていったり学級の中でお互いのよいところを伝え合う場を設けたりする。また、縦割り班活動の振り返りでは、基本の型を提示し、抽象から具体的な評価ができるようにする。子供同士の評価につなげていく。また、否定的に考えている児童については、全職員に周知し、より多くの職員で声を掛けたり見守ったりしていく。
健やかな体の育成 (保健部)	生きる力の向上	体力の向上	体育(運動)が好きな児童の割合は92%で、目標値を達成することができなかった。1学期は暑さのため、外遊びができない日があったものの、運動を好み積極的に外に出て遊ぶ児童と、教室でおしゃべり等をして過ごす児童(特に女子)の二極化が顕著にみられることも要因として考えられる。 生活習慣調査において、週5日以上望ましい生活習慣ができた児童の割合は約92%で目標値を達成することができた。 特に達成率が低かった項目は、「早寝」で学校全体で約82%の達成率(低学年76%・中学年80%・高学年94%)であった。次に達成率が低かった項目は、「メディア」で学校全体で約92%の達成率(低学年95%・中学年96%・高学年86%)であった。	外遊びの奨励については、担任だけでなく、委員会の児童にもその必要性を理解させ、使命感を持って全校児童に呼びかけを行うようにさせる。 2学期の生活習慣調査を始める前に、1学期の結果を振り返り課題意識を高める。特に課題の見られる睡眠とメディアについては、保健指導を重点的に行う。 児童だけでなく保護者に対しても生活習慣調査結果について周知し、課題のある項目について啓発を行う。
		自分の命は自分で守る力の育成	自分が住む地域に起こりやすい災害について理解している児童の割合及び災害時に避難する場所や避難の仕方について理解している児童の割合は、100%であった。避難訓練や防災の取組の際に、定期的に確認したり防災ノートに振り返りをさせたりすることで、児童の意識が定着してきていると考えられる。また、土砂災害対応携帯マニュアルやひろしまマイタイムラインを活用したり、地域ぐるみで地域合同防災訓練を実施したりしたことにより、意識が高まってきているといえる。 また、呉市学校防災週間に実施した防災朝会で、教師の体験談を聞くだけでなく、体力・安全委員会による防災クイズを実施したり、6年生代表児童が発表したりするなど、児童が主体的に参加できる内容にしたことで、より自分事としてとらえてきているといえる。	家庭を巻き込んだ防災教育を推進し、自分の命は自分で守る意識を醸成していくために、2学期以降も防災参観日や社会科や総合的な学習の時間の学習などを生かして、発達段階に応じた取組を継続していく。また、地震・津波対応携帯マニュアルやひろしまマイタイムラインを活用し、日々、子供たちが防災を意識して生活できるようにしていく。また、避難訓練では、避難経路を使用不可にしたり、けが人の発生を想定したりするなど実践的な避難訓練を実施し、さらに自分の命は自分で守る意識を高めていくようにする。
業務改善	意欲と能力を発揮できる教育環境の整備	働く意欲(働きがい)の向上	ほとんどの職員が多忙感はあるものの、児童と向き合う中でやりがいをもって職務に当たることができている。児童のよい姿容を見付けることで充実感を得られる職員が多い。	児童対応や校務分掌を一人で抱え込むことのないよう、職員間で声を掛け合い、何でも言い合える風通しの良い職場環境を構築していく。児童の話や授業の話を中心に職員間の交流や支え合いなどできる時間を大事にする。
		長時間勤務の削減	時間外勤務が45時間を超えた職員は4月5月が5人、6月が4人、7月0人であった。年度当初の書類作成や教材準備、生徒指導等に当たる時間に多く費やされていた。持ち帰りの仕事をする職員もあり、タイムマネジメントで業務の効率化を図るまでに至っていない状況にある。	夏季休業中の時間を2学期以降の行事計画や教材研究に充てるとともに、リフレッシュできる時間を確保していく。自己の健康のためにも時間外勤務時間の軽減が必要であることを伝え、校内研修を通して職員相互の仕事のやり方の工夫を交流し、自分の働き方に取り入れるようにする。